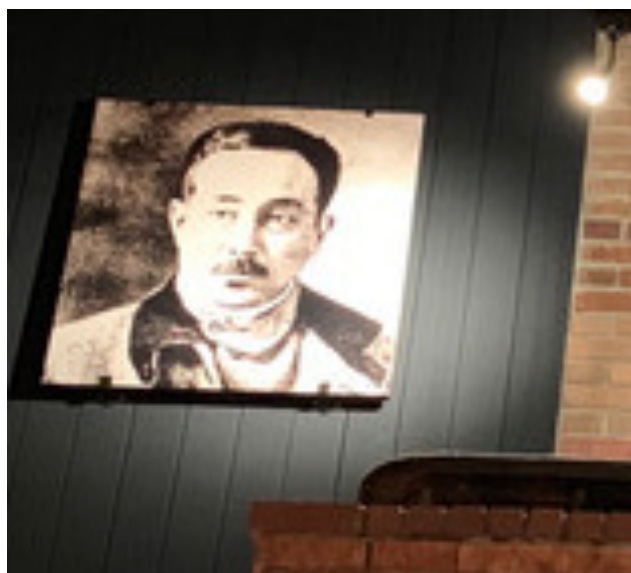


土香る会

読書会感想文集 Vol.42



2022年6月

【目次】

第45回読書会(2022.6.18)

有島武郎『断橋』・・・P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

Vol.29からは、有島武郎の作品でまだ読んでいなかった小説の読書会、
いわば第4シリーズの読書会感想文集となりました。

●問合せ先／土香る会事務局(春日井方)0136-44-2106

第 45 回読書会のまとめ

『断橋』

(文責：井上剛)

この作品の中には2組の人間関係が設定されているのですが、何故だろうと読んですぐに思ったという参加者あり。他の参加者から国木田独歩の作品からヒントを得たという情報が出ました。近親相姦という劇薬のような筋立てを使って、木部と葉子の過去の関係を際立たせる効果を狙ったのではないかという意見が先の答になるのですが、その割には劇場での芝居はあまり評判がよくなかったそうです。有島は戯曲の専門家ではないので、書き方が十分ではないという評価があったらしいという話も出ました。

「遺書」のような作品だと思うと感想を述べた人がいました。さらに、戯曲全体への感想を述べてみようという気になれなかったと続きましたので、理由を尋ねたところ、この作品は情死の直前のものであり、自分の気持ちを整理して自死しかないと思っていた時の作品だと、つまり作品全体が遺書ではないかと思ったからだそうです。

宮本百合子が有島の告別式に参列したあとの想いを綴った文章の紹介がありました。その中に「彼は第一に情の人」という表現があり、一般に言われる「学識の人」「知性派」と違うイメージに驚きの声も上がりました。「情の人」ということは初めて聞いたので、有島はそういう人だったのかと改めて思ったという感想も出ました。「有島は情の人」の想いを参加者が共有できた場になりました。

劇中の始めと終わりに出て来る稲妻を取り上げた人がいました。他にはこのことに触れた人はいませんでした。ぱっと光る稲妻を人生を明るく照らす絶頂期と見て、あとは暗闇だという考えでした。そのように指摘されると稲妻は劇中で使われている暗喩かもしれないという意見が出ています。

「多々益々弁ず」という表現に対して有島は使い方を間違ったのではないかという思い切った意見がありました。この表現について他の参加者は取り上げていなかったのもそれ以上進むことはありませんでしたが、感想文を読んで辞書で調べるなどしてみると面白い発見があるかもしれません。

「明るさ」に着目した参加者がいます。劇中、木部の台詞として「僕一つ久しぶりで小説が書いてみたくなりましたよ」があります。この言葉には「一種の不思議な明るさ」と言います。自死の年(T12)に発表した『酔狂』『或る施療患者』『骨』『親子』にも共通してこの奇妙な明るさを感じられること、苦しんだ数年間の闇の中からもう一つの自分を生み出そうとする祈りのような、開き直ったかのような明るさを感じることに、さらに有島が最後に書きたいくつもの書簡(心中に向

かう心情を書いた実質的な遺書)にもその奇妙な明るさがみられることの指摘もありました。

このことに関して、有島は明るさに託していたものがあつたのではないか、でも結果としてそれは実らなかつたという意見がありましたし、同じような趣旨で、遺書の中には明るさがあつたが、作品にはそれが戻らなかつたという発言もありました。奇妙な明るさは有島が自分のアイデンティティを取り戻したと言えるのではないかという意見や、心中に関しても波多野秋子と一緒にいてその奇妙な明るさを感じられたから心中したのではないか。それまで越えようとして越えられなかつたものを心中することで越えられると思えるような力を与えてくれたのが秋子だつたという意見がありました。先に出た話に引っ掛けて、有島にとって秋子と出会つたのが稲妻だつたかもしれないという感想もありました。

自立心とか自由に生きることについても話し合いがありました。どんな生き方であれば自由に生きることになるのか、どうなつたら自立心がある女性だと言われるのか、働いている女性は自立心があると言うのか、家庭に入って家事などを行っている女性には自立心がないのか、金で縛られたくないということか、男性に養ってもらいたくないということか、等々いくつもの疑問が出ましたが、結論は出ません。金は社会の中で男女関係を規定する大事なものだし、葉子の場合など自分に金を出してくれる男性がいるから出してもらおうとするドライな女性として描かれているという意見もありました。

「どうしたら女性が自立できるかは男性である自分には分からない」という有島の言葉が紹介されましたが、それに続く「だから女性が考えるべきだ」という考えには反論が出ました。社会の仕組みによる制約はどうするのか、女性のみが考えて済むことではないなどの意見が出る中で、男性は女性の自立を妨げないようにしてほしいという切なる願いが出ました。それこそが社会の仕組みによる制約ということなのですが、制約を女性に強制している男性は無自覚であることが多く見られるので、そういう男性に対して物申す(=声を上げる)ことは難しいのではないかと。折角声を上げたのなら周囲が味方になるべきだなどの意見も出ましたが、日本社会の風潮としてそうやって関わろうとする人は中々出てこないだろうなどとみんな悲観的になりました。女性が先ず解決策を考えよとか、声を上げよという考え方に対しては、女性に押し付けている間は解決しないので、押し付けている男性側が先ず自覚を持って、そうしない努力をすることが必要だという当たり前の結論に落ち着きました。

最後に、イプセンの戯曲の中で、主人公の言動を評して登場人物の一人が「命の渇き」がそうさせるのだと説明する部分があるとの紹介がありました。葉子にも当てはまるようですが、それを聞いて、いい言葉だなあと呟いた参加者がいました。何を意味するのか漠然としたところがありますが、自分の場合はどうだろうと考えてみることは自分を知ることにつながるような気がします。

※参加者：井上剛、梅田滋、春日井雅子、高木直良、藤波ひとみ（五十音順）

※感想文のみ参加：玉田茂喜

どうしても、有島の情死の決断と関連付けて読んでしまう内容だ。自死の年の1月と言えば、秋子との関係に悩み、その先への不安—破滅に至る道を描いていたのではないだろうか。「遺書」のような作品だと思う。直後の3月には波多野秋子からの手紙を受取った時期のようである。

木部の19才の「葉子」との「夢」が裏切られた思い出話のセリフ、「嘘偽りの名人」「あいつを憎むところまで行きました。」そして、高橋の「運命の呪い」と言い、「運命の鬼が巧みに使う道具のひとつは「惑い」だ。自殺には決心がいる」「私は自滅するんだらうと思ひますよ。…何のためにこの世に生まれてきたんでしょう。…私は苦しい。」などは本人の心情そのものと思う。しかし、作中の木部と高橋のやり取りやそれぞれの状況設定など戯曲全体への感想を述べてみようという気にはなかなか出来なかった。

今回、ネットで宮本百合子が告別式に参列し、焼香した後の思いを綴った「有島武郎の死によせて」を初めて読んだ。報道で情死を知り、『実に心を打たれ、その夜は殆ど眠れなかった。…。彼には、実に多くの、美しい、センチメンタリティー、甘さがあった。自分のような女性、若者にもなお且、その柔さで物足りなさを覚えさせるほどの。而も、彼には、人間として精進し、十善に達したい意欲が、真心から熱烈にあった。…。彼は、学識と伝統的なセルフレストレーンの力で、先ずハートに感じるものを、頭の力で整理したと云う人であった。人情によって理解し、直覚し得たところを、理想に燃える知で文学にした。情と知とを二分別し得るものとすれば、彼は第一に情の人で、それを粗野に取扱われなかった情そのもののデリカシーと、後天的の品とがあったのだ。…「或女」以後、私は、彼の作品が、或行き詰りをもち始めたことを知った。読んで見ると、精神の充実したフルーエントなところがなく修辭的でありすぎ、いつまでも青年の感傷に沈湎して居るような歯痒さがあった。「星座」にも同じ失敗を認める。大づかみに、ぐんと人生を掴まず視点が揺れ、作家としての心が弱すぎた。為に、あれ丈文化的価値を裏に持った素材が、明かにこなされ切れなかった。時に、彼の精神の或面に、私が、物足りなさによる侮蔑に近いものを感じたのは争われない。何か、この先もう一つ、吹っきれば素晴らしいのが見えて居るのに、いさぎよくそこまで踏切ってなぜ呉れないか、と云う愛の変形であったのだ。

…。男の四十六歳はあれ程危険な年齢か。彼の青年時代から引続いた精神的緊張の疲労が、深い休安、慰撫を求めて居た時、ああ云う消極的の愛が、あれ程積極の力を出して、彼に働きかけたのか。…。彼の恋愛は、始めのものから、所謂不幸なものであったように思う。彼はその不幸のそこから、人生に徹し得ると云う求道的の歓によって光明を得て来た。

今度の恋愛は、彼の大きい一生上の一つの引潮に際し、不幸は以前に倍して大きいとなれば、常識の云う最大の不幸、「死」をとおして光明を感じたことを、認めない訳には行かない。』同時代を生き、闘っていた女流文学者の熱い想いが感じ取れる。

1. 稲妻のこと

稲妻の話で幕が開き、稲妻が光って幕が下りる。「あれを見ていると気が狂い出しそうになる」(p432)稲妻とは何なのか。高橋は人間の生活をたとえて「丸で意味のない一ひらめきの稲妻」と表現はしたものの、そのあとでは肯定的な受け止めも見られ、「稲妻のように、ぱっと光った人生を見せるかと思うと、そのあとさきは暗闇」だとも言った。人生の浮き沈みで言えば、浮き上がった瞬間が人生における好調期（又は時に絶頂期）であり、それは稲妻のようにほんの一瞬に過ぎず、後は沈みっ放し（暗闇）だということになるだろうか。

次に稲妻が出てくるのは最後になってからで、辺りが暗くなって稲妻がし始める。高橋は「成程、稲妻だ」(p451)と言い、憂鬱になる。その後木部が遅くまで付き合ってくれるのを喜びながらも「稲妻の奴」(p452)と悪態をつく。二人が退場した後は稲妻がしきりに光って幕が下りる構成となっている。

好きな人が出来て結婚したという稲妻のような一瞬の出来事に有頂天になったが、妻と自分の関係が判明しても誰にも打ち明けられず、以来ずっと暗闇に入ってしまったことに恨み節が出ることになった。なまじっか一瞬の光を知ったばかりに、と言わんばかりだ。

誰の人生であっても稲妻のように一瞬の輝かしい出来事が度々あるはずもない。「人々に囲まれて自分が主人公になる機会は、誕生、入学、卒業、結婚、葬式くらいであるから、堂々と顔を上げて式に臨みなさい」と約500人の卒業生に学年主任として話したことを思い出した。生徒指導で実に先生たちをてこずらせた生徒たちであったが、卒業式では生徒たちに光が当たり、近年になく立派だったとの評価をいただいた。

2. 人の見掛けのこと

他人の様子からその人を判断するのは、出来ないとは言わないが難しいことが多いだろうと思う。高橋は木部に「あなたというものを知っていてお話を聞いていると、あなたの味われた苦痛がよくわかるようです」と言った。逆に言うと、あなたを知らなかったらあなたの苦痛はあまりわからなかっただろう、となる。まさにその例が劇中に3箇所出てくる。（下線は引用者）

一つ目は呉服行商と木部の会話(p438)

呉-----然し御結構なことで御座います。何か御酒まで御携帯で…

木-----僕等兩人結構と見えますかね。…僕から見るとあなたの方が余程結構ですよ。

二つ目は倉地と木部の会話(p450)

倉-----あすこに寝とるのは、あれは誰ですか。

(略)

木-----なあに、僕同様なやくざな男です。酔っぱらって寝とるんです。

倉-----それはまた呑気ですな。

木-----さっき、ここを通って行った太物屋の爺さんもそういいましたよ。

三つ目は高橋と木部の会話(p451)

高----- (略) おや、誰れか来ましたね。(略)

木----- (略) 新婚らしい若夫婦がこの上に来て困っていたから、渡してやったんです。(略)

高----- (略) ちっとも知らないで寝ていましたが……大分睦じそうですね。ちがった世界でも覗くようですねえ。こう静かになった秋の鎌倉を、ああして歩きまわる気持ちは呑気でしょうね。

「結構」も「呑気」も同じようなニュアンスだが、当人をよく知らない人からの評価はこういうものだろう。だからと言って、当人をよく知っていると言う人も実際は知らないことの方がはるかに多いわけで、五十歩百歩と言える。結局当人をよく知るのは当人のみということになるし、ひよつとするとそれも成り立たないのかもしれない。

そういうことが分かっていたからなのか、有島は弟妹に宛てた遺書の中で「どうか暫く私達を世の習慣から引離して考えて下さい」と書いた。また、劇中の葉子と木部の会話に次の台詞もある。(p448)

葉-----あなたはなさろうとさえなされば、何んでもお出来になる癖に。

木-----出来るもんですか……人間に何が出来るもんですか……

人は誤解し、誤解されることを繰り返して一生を終えるのかもしれない。

別の話を書く。ある会の便りに、後藤佑季さんという方のインタビュー記事があった。東京パラリンピックの主に陸上競技でNHKリポーターを務めた彼女はNHK在職中でありながら慶応大学を首席卒業した経歴の持ち主であるが、日常生活や仕事では「皆さんから聴覚障がいがあるとは分からないと言われ」るそうだ。それは聞こえる人の世界で生きるために「話す・聞く」リハビリを重ねたから。現在彼女は、「耳から聞こえる言葉が4割、相手の唇の動きを読むのが3割、文脈から予測するのが2割、表情から察するのが1割」くらいで理解しているそうだ。注目すべきは「努力すればするほど障がいは見えなくなっていました」と語っていること。それが彼女にとって、また社会にとっていいことなのか分からない。先の下線部のように彼女が言っているからだ。障がい者は2つの世界に生きている。

大学の英語の授業では、普通に話せるのに何故シャドーイング（聞こえてきた英語を即座に繰り返すこと）が出来ないのかと教員に言われ、自分の聴こえ方の状況を説明したが理解されなかった経験があり、聴覚障がいは「見えない」障がいだと感じたそうだ。「私のような見えない障がいのある人は困りごとや助け方も『見えない』ため、時として誤解されたり理解されないこともあります」

とも言っている。現在彼女は重度難聴で、左耳に人工内耳を装着しているとのこと。人は見掛けでは分からないことの例として挙げた。

3. 葉子のこと

魚釣りの話から始めてみる。

木（高橋に）-----二人でここで一緒に鯊（はぜ）を釣ったりしたもんです。（p434）

葉（倉地に）-----私……釣りなんぞしたことありませんわ。（p442）

葉（木部に）-----（略）私は始終あの頃のことを思い出しています。ここであなたと一緒に釣りをしたことを……（p444）

葉子は明らかに相手によって言うことを変えている。しかしこれとて、何故葉子が嘘をついたのかの推測は可能だが、どれ程切羽詰まっていたかなど嘘を取り巻く状況は本人にしか分からない。人は見掛けとは関係なく罪深い存在であり、他人には一生打ち明けることのない闇の事実を抱えて生きているものだと思う。嘘をついたからと言って非難して切り捨てるだけでは何も解決しないように思う。

自立して生きられない葉子について考えてみる。

・木部が高橋に披露した葉子評は次のようである。

「碌々人と交際もしないような貧乏詩人じゃやり切れませんや。手っ取り早くそこに見切りをつけた、その見切りのつけかたのすばしこく而かも理屈にかなっているのなぞは見上げたものだと今だに思いますね。（略）なあに、あいつは……女つてものは嘘偽りの名人なんだ。」（p435）

・葉子（倉地に）-----あなたの為めなら……そうならどんなことでもしようと思ってしまったんですもの。（p440）

自分にとって得にならないと判断すればさっと離れていく一方で、必要とあらばとことん擦り寄っていく。後半で木部と葉子が話す場面でも、

（ト書き）葉子倉地について行こうとするのを木部はげしく眼でとめる。葉子木部

と少しく離れて立停る。（p443）

（ト書き）葉子段々木部に近づいて来る。（p444）

（ト書き）葉子取りすがるように木部に近づこうとする。木部何気なしにそれをかわして（略）（p448）

という流れになっている。葉子は初めのうち、出来れば関わりたくない気持ちでいたが、木部が倉地に自分の過去について何か言うことを恐れたのか、徐々に木部に近づき、ついに一度会って話がしたいとまで言う（p449）。しかし葉子に現実を思い知らされた（＝夢を破られた）木部は冷静な対応だ。

・最後には木部から「お葉さん、覚めてしまった昔の夢なんかは漁らないで、いい奥さんにおなりなさい。（略）僕にも僕だけの覚悟はあります。」（p449）と言われて、木部が倉地に何も喋らないことが分かって安心したか、それ以上は言わずに倉地と二人で木部の舟で川を渡っていくので

ある。

「昔の夢なんかは漁らないで…いい奥さんにおなりなさい」と言う木部の真意は、いつまでも男との夢を追いかけて、夢から覚めて一人の男とまことの生活を送りなさい。それがあなたの幸せにきつと繋がりますから、ということであっただろう。そう言えば木部は高橋との会話のなかで、「妻になって見ると当世向きの令夫人らしい生活を欲したのでしょうね」(p434)と言っていた。愛する男との結婚生活が主ではなく、一定レベルの生活保障を追いかける姿勢を見抜いたのだろう。そこから考えた木部なりの、葉子が救われる手立てを助言したと言えるのではないか。

4. その他のこと

(1) 正しい使い方か？

「大抵の人はどんな大事件でも器用に茶かして、多々益々弁ずるでしょう。」(p433)
とあったが、下線部は、ああだこうだといろいろ言うでしょう、ぐらゐの意味で使ったと思われる。そこで「多々益々(ますます)弁ず」を調べてみた。

・意味：1. 多ければ多いほど好都合である。

2. 多ければ多いほど使いこなす。---うまく処理する。手腕、才能にすぐれ、余裕のあるさまにいう。

・韓書の中の韓信伝(漢の高祖劉邦と部下韓信のやり取り)による故事に基づく。

・「弁ず」は、処理する、物事を取りさばくの意である。

・多弁の意味で使うのは誤り。(誤用例)「彼は多々益々弁ずで、本当に口がうまい」

・大正時代には誤用ではなかったのではないかと思われそうなので、与謝野晶子の『母性偏重を排す』からの引用を示す。

「豊富な性情と健康な体質とを持った女は子供も産むがよい、社会的事業にも従事するがよい、その他能うかぎり何事に向っても多々益々弁じて欲しいと私は思っている。」(Wiktionary)
有島の使い方は間違っているのではないか。

(2) 呉服商を舟で渡してからどうなった？

木----御機嫌よう。和田塚はこれを行くと左側にありますからね。

呉----はいはい。

(ト書き) 呉服商去る。木部舟をつなぐ。

木----さて日の暮れない中に二三尾釣り上げるかな……高橋さん。寝込んじゃったな。(p438)

川のこちら側に木部は高橋と二人でいた。そこに呉服商が来て困っていたから舟で向こう側に渡してやった。呉服商と別れたのは向こう側。その後高橋に声を掛けたのはこちら側であるはずなのに木部が舟で元場所に戻った記述がない。解決策としてはト書きを次の下線部のように補えば済むと思われる。

+ (ト書き) 呉服商去る、木部元の場所に戻って舟をつなぐ。

(3) 呉服行商はなぜ太物屋さんか？

和服のことに疎いので早速調べた。

着物は絹で織ったものを呉服と言い、それを扱うのが呉服屋だった。それに対して綿や麻などの太い繊維で織ったものを太物と呼び、それを扱うのが太物屋であった。

次第に両方を扱う店が現れ、呉服太物屋と言われた。江戸時代からの呉服商の看板に「呉服太物商」の表記が見られるらしい。後にそれが単に呉服屋になったようだ。

ではなぜ木部は呉服行商が太物屋だと分かったのだろうか。絹織物のような高価な商品は犯罪に巻き込まれたり、運搬で質の劣化を招くなどの危険性を考えて店でのみ扱い、行商には太物というのが一般的であったように思われる。(単なる推測です)

有島読書ノート 16：『断橋』と『或る女』

Ums.

気になっているので何度か読むのだけれど、どうしてもモヤモヤが晴れない作品がある。

有島武郎の最晩年の作品『断橋』（T12）も、私にとってはそのひとつだ。

これは、『或る女』（T8）の第37章を中心とする同じ状況を、少し異なる観点から戯曲に表現し直した作品である。

二つの作品

『或る女』の第37章では、互いに感情のもつれが深みに嵌まり込んだ葉子と倉地が、久しぶりに一緒に旅に出て、かつて葉子が木部と暮らした鎌倉の滑川に来る。川沿いを歩きながらかつてのことやこれからのことを会話する二人の声を聞いて、川沿いで釣りをしていた一人の男が葉子に声をかける。木部だった。驚く葉子を前に、木部は倉地に簡単な自己紹介をし、三人で川沿いを歩きながら何気ない会話を続ける木部に、最初は警戒心を抱いた葉子も、次第に変わってしまった木部に心が打ち解ける。木部は、Tという男の話聞きながら日がな釣り糸を垂らしていると近況を話す。葉子は、定子のこと等を伝えたくて木部に再会を求めるが、木部はそれを避ける。葉子と倉地が川の対岸に渡ろうとしていたことを知った木部は、川が洪水で流されたからと、自分の田船で二人を対岸に渡す。船が向こう岸に着くと、木部は二人に別れを告げて去る。残された二人の間でなされた木部をめぐるやりとりの中で、葉子は、深い鬱屈に襲われて倉地を困らせる。

「突如として又云いようのない淋しさ、哀しさ、口惜しさが暴風のように襲って来た。又来たと思ってもそれはもう遅かった。砂の上に突伏して、今にも絶え入りそうに身悶えする葉子を、倉地は聞えぬ程度に舌打ちしながら介抱せねばならなかった。」（或る女／後編第37章）

葉子のこの状態は、宿に戻ってさらに深刻化し、その夜は、二人別々の床の中で葉子は絶望感を一層募らせて苦しむ。

『断橋』は、描写の主客が入れ替わって、木部が高橋という男と滑川の川縁に座って釣りをしている状況から始まる。木部は葉子との暮らしと別れについて話し、高橋は、愛し合って結婚した女が実は自分の実の妹であったことが分かり、それでも二人が深く愛し合っているが故にその真相を伝えることが出来ぬままその運命を呪い、いつも川縁で一人酒を飲んでいるという身の上を話す。会話はどちらがより不幸か、というやりとりになっていく中で、川縁を歩いてくる男女の会話が聞こえる。木部はそれが葉子の声であることに気付く、葉子に声をかける。驚く葉子を尻

目に、木部は倉地に、葉子と短い時間だけ話をさせて欲しいと頼み、倉地はそれを受けてその場を立ち去る。木部は、自分の近況もそこそこに、高橋の近親相姦の愛のエピソードを語る。その内容のおぞましさに身を震わせる葉子。葉子にとって、それは二人の過去に重なってくると思える内容だった。

戻って来た倉地と葉子を、木部は自分の田船で対岸に渡してから、その場を去る。

釣り場に戻った木部は、酔いの眠りから覚めた高橋に、久しぶりで自分の小説が書けそうだと告げて、幕が下りる。

「木部：高橋さん、僕一つ久しぶりで小説が書いてみたくなりましたよ。」（『断橋』/全集第5巻P451）

この二つの作品のどこが、自分にとってモヤモヤしながらも引っかかったまま離れないのか。

書くことへの祈り

二つの作品を読み比べて最初に思ったことは、『或る女』に対する理解を深めるもう一つの道が『断橋』に示されているのではないか、という問題意識だった。

そこで、共通する部分より、異なる部分に着目して比較し考えてみた。

些細な違いを除けば、大きな相違点は、高橋という男の悲劇的な運命に関するエピソードが、

『断橋』の中心テーマとさえ言い得る程の重みを示していることである。比して『或る女』第37章では、木部と葉子の会話に具体的なモチーフは感じられず、木部の不意の出現によって心が乱された葉子の心境の変化が展開の軸になっている。

つまり、『断橋』を書いた武郎の意図は、高橋のエピソード、これは国木田独歩の『運命論者』（M36）に依拠しているものだが、この挿話と葉子の人生を重ねて見ることにあったのではないか。『断橋』の中で、木部からこの話を聞いた葉子は衝撃を受け、我が身に重ねて受け止め、木部にもっと話し合いたいと頼むが、木部はさりげなくその意図を逸らし、話題の接点を深めようとはしない。

しかし、葉子の運命と高橋の運命を重ねてそこに新たな文学世界を描こうとしたと思われる武郎の意図がどこまで作品に凝縮されたかと言えば、何度読み返しても、ストーンと理解の掌に落ちてくれない。自分の読解力のせいかもしれないが、しかし、この戯曲は発表された当時もさほど反響は良くなく、上演された舞台も成功しなかったことからすると、これは失敗作ということになるのだろうか。

そうかもしれない。

それならばそれで仕方ないのだが、失敗作であったとしても、それがどうしてこんなに心に引っかかったまま、釈然としない気分を引きずるのだろうか。

それは、武郎が作品として託した意図は成功しなかったものの、作家として追いつめられた危機的状況が滲み出るように表現されたが故に、心が打たれるからではないか。

この鬱々とした感想を容易に追い払えないのは、作家武郎であり人間武郎である彼の苦しみが、不器用な形で吐露されているからだろう。

そのことは、再びの引用になるが、次の表現に表われている。

「木部：高橋さん、僕一つ久しぶりで小説が書いてみたくなりましたよ。」（『断橋』/全集第5巻 P451）

これは、木部（国木田独歩）に仮託した、武郎本人の心からの願望だったのではないか。

『或る女』上梓以降、書きたくても書けない状況が続き、苦心して手がけた長編『星座』も『運命の訴え』も書き続けることが出来なくて、未完に終わっている。

この苦しみが芸術家にとっていかに苦しいものか、私には想像を絶するものがある。

しかし、そんな自身の状況が続いた最後の年（！）、自死の約半年前に、木部にこのように言わせた武郎の想いが奈辺にあったかを想像すると、心が押しつぶされるような苦しさを感じる。

しかも、この絞り出すような言葉が一種の不思議な明るさをもって表現されていることに、鳥肌が立つような戦慄を覚える。彼の作品群中もっとも暗いと思われる『或る女』の変奏曲として、奇妙な明るさを漂わせながら書かれたこの作品に、作者の複雑な暗い闇を感じた。

この印象の矛先は、『或る女』から『断橋』に向うベクトルを示している。

武郎が佐々城信子と最初に出会った札幌農学校卒業の翌年（M35）から、『或る女のグリンプス』（T2）を経て『或る女』（T8）を上梓し、さらに自死の年（T12）に書いた『断橋』まで、武郎は、人生のほぼ全てを貫いて早月葉子（田鶴子）に関心を向け、その最後の最後に、こともあろうに国木田独歩の『運命論者』を重ねながら、闇の中の奇妙な明るさを絞り出したのである。

この闇の中の奇妙な明るさは、自死の年（T12）に発表した他の作品群、『酒狂』『ある施療患者』『骨』『親子』にも共通して感じることが出来る。特に『親子』では、父（武）と子（武郎）の先が見えない確執の行く末を、まさに闇の中に凝視した光として描き、最後の到達点を象徴する表現となっている。

「厠に立った父の老いた後姿を見送りながら彼も立ち上がった。縁側に出て雨戸から外を眺めた。北海道の山の奥の夜は静かに深更へと深まっていた。大きな自然の姿が遠く彼の眼の前に広がっていた。」（『親子』から）

この最後の闇夜の情景に、『断橋』の木部の言葉が重なって来るように感じるのは、私の妄想読みだろうか。

武郎が、苦しんだ数年間の闇の中からもう一つの自分を生み出そうとする祈りのような、開き直ったかのような明るさを感じるのは、私の余りにも独断的な妄想だろうか。

しかし、この祈りが現実に実ることは、ついになかった。

起死回生を賭けた『星座』（T10／未完発表）も『運命の訴え』（T9／未発表）も既に未完に終わっていて、奇しくもそれが後の彼自身の挫折を暗示するものとなった。

武郎の絶望感は、絶筆となった『独断者の会話』（T12）の中で、絶え絶えに呟かれた。

彼の最後の書簡群は、心中に向う自分の心情を書き記した遺書となったが、その奇妙な明るさが、『断橋』などこの同じ年に発表された作品群に共通してみられることは、単なる偶然なのだろうか。

闇に眼が慣れた時に感じる奇妙な明るさ。

そのように死んでいけるのだとしたら、最後の楽しみとして自分も与りたいものだと、秘かに思う。

しかし、はたしてそうだったのだろうか。

わからない。

1 初めに

この脚本は、わずか半年だけ夫婦であった女に捨てられた男が、六年後、女に再会した自らの心を語り、その語りへの応答を介して女の心を描こうとした作品である。一読して木部が中心であるように見えるが、作者の関心は葉子に向かっており、葉子を描くのが狙いである。

しかし、葉子を語るために葉子単独では語るができず、木部をはじめ何人もの脇役を必要とする。彼らがそれぞれどのような現在を生きているかについて、あらかじめ語っておかなければ、二人の間に交わされる会話の意味が読者には伝わらない。そこで、木部のために第一段落が、葉子のために第二段落が用意される。木部と葉子の「今」が知らされたところで二人が出会う。これが第三段落である。脚本は大きくこの三つの場面で構成されている。

第一段落は高橋夫妻の話。高橋が木部の問いに答える形で近親相姦の夫婦というおぞましいが、命がけで愛し合っている話が語られ、その話の聞き方が木部の姿を語る。この話は木部が自らの葉子に対する気持ちを語る材料として、のちにもう一度間接話風風に葉子に語りなおされる。第二段落は葉子と倉地の物語。倉地から見てライバルかもしれない木村に葉子が金を無心したことが話題になっている。倉地は金銭面でも全面的に自分が頼られることを望んでいるが、葉子は倉地が不如意に陥っていることを知っており、迷惑をかけたくないので木村に無心をしたのだと説明する。木村については無心の相手だという以上のことはわからない。倉地と葉子は婚姻関係にあるのではないだけでなく、金銭をめぐる葛藤があって、それが象徴するように必ずしも円満な男女関係ではない。第三段落で葉子と木部が六年ぶりに話をするが、木部が熱っぽく語るのに対して葉子は冷淡な態度でいるように見える。

脚本の題名は『断橋』である。壊れた橋のせいで向こう岸に渡れないのだが、両岸に一組の男女がいて、お互いに通じ合う術がないことを象徴的に示している。通じ合う方法を失っているという点では、倉地と葉子、高橋とその妻、気づきにくい木部とその妻も同様なのである。それらの男女関係と類比的な関係に木部と葉子もある。作品としては三組の男女の交通の絶たれ具合を細部まで描き切って初めて、木部と葉子の「悲劇性」が浮かび上がってくるはずだが、作者の構想の中ではこれを描くことは重視されていない。

ここで私が『断橋』を読むときの立場について触れる。作者の側からいえば、自分の作家としての足跡を知っていることを読者に要求せず、作品単独でどれだけ読者を作品の世界に引き込めるかという点が作品の成否を決めると見る。人物の名前からして『或る女』にかかわる人間関係が構想に組み込まれているらしいことは有島の読者ならすぐ気が付くが、『断橋』で提供されている内容・情報だけに基づいて読んだ時にどのような作品世界が浮かび上がるか、このことを基本にして考えたい。なお、文中の引用は新仮名遣いに改めている。

以上を踏まえて、もう少し丁寧に読み込んでみたいことが四点ある。第一に、近親相姦夫婦高橋

の苦悩とそれに対する木部の関心の落差について。第二に、不倫関係の倉地と葉子の金銭をめぐる葛藤から見えてくる葉子の現在について。第三に、木部と葉子の間で「夢」をキーワードとして交わされる会話の意味と、高橋夫妻という相思相愛モデルとの対比で木部が葉子に「昔の夢なんかは漁らないで、いい奥さんにおなりなさい」と語る言葉の破壊力について。第四に、「夢」の語を通して葉子が守ろうとしている自己の世界つまり「命の渴き」について。

2 近親相姦と相思相愛

第一段落の範囲を少し広めにとると、冒頭から呉服商が退場する 439 頁のト書き部分までである。この段落では木部が高橋の打ち明け話に合わせて自らの過去と現在を語り、木部の過去と現在の心境が浮かんでくる。

(1) 木部の「愛の賛歌」

木部は結婚しており子供もいて、高橋の目には幸福と見えるが、木部自身は必ずしもそうは感じていない。誘われれば藤沢の遊郭に女を買いに出かけるとも話していて、六年前とはすっかり変わっていることを自覚している。葉子と鯊釣りを楽しんだりして「夢の中にとろけこんだろような」頃に作った詩を高橋に紹介している。大胆に意識してみる。

未来に希望の持てない生活に絶望していたとき、君に出会って春の月夜のような幸せが訪れた。恋のせいで心がうっとりとして楽しい夢を見ては、その夢が覚めないうちに、若く激しい情熱が……君よ永遠の国に住もうよ、この愛と幸せが永遠に続く国に。(434 頁。原詩は省略)

葉子を賛美する詩であり、葉子とともに永遠の愛に生きようという決意を詠っていて、19 世紀末の浪漫主義の残響も聞こえる。そうだからなのか、どれほど意識していたかは覚束ないが、現実が夢のように幸せに満ちていると詠う一方で、愛を夢に譬えながら覚めないことを願うことが夢は覚めるものだという歌の世界の常識もかすかに響いていて、幸福がはかなく消えていく不安も隠れているように見える。愛の絶頂の時の詩に於いてである。疑えば、六年前の高揚感(激動)を紹介する詩だから今の気分による作為が働いているとも考えられるが、ここでは六年前の原詩そのものと理解しておく。なお、「……」の部分は忘れたことになっているが、実はもっと多くのフレーズがあったのを略しているためだとみなしておく。大事なのは「……」の後ろの部分にあるからである。

(2) 畜生道を生きる運命

木部が高橋に問う。「あなたはあのことが分っても、やはり奥さん」は「あなたを愛しているんですね。」「而してあなたもその女を愛せずにはいられないんですね」(433 頁 2 行目～)。高橋が答える。「運命というんでしょうね。運命の咀いです。(略)何もかも知り抜いている私が、如何にしてもあれを思い切ることが出来ないんですから……木部さん、畜生道です……けれどもそれをどうしようもないんです」(433 頁 6 行目～)。「あのこと」とは「畜生道」と言い換えられているので、近親相姦のことだと分かる。高橋は最愛の妻が父違いの妹だったと思いがけず知って、これを運命の咀いだととらえた上で、妹を妻として「思い切ることができない」と言う。不幸な結婚であっても堅

い愛情の絆で結ばれていること、この不幸の解決策を高橋自身では見つけられないこと、妻と義母(実母)が知ったら破滅が訪れること、世間から道徳的な非難を受ける恐怖に怯えていることが語られている。

近親相姦を扱った小説を二編思い出した。ずいぶん昔に読んだのでディテールは覚えていない。一つは三浦哲郎の『百日紅の咲かない夏』で、姉と弟が肉親の愛情ではなく異性として愛し合っていると気づいて悩み、肉体関係を結ぶことなく心中する話だった。もう一つは天童荒太の推理小説『永遠の仔』で、父親から性的虐待を受けている中学生になるかならないかの娘が、石鎚山の登山道で父親を深い谷底に突き落とす話だった。世俗のタブーに対する心中と父殺しという「解決」がそれぞれ用意されていたが、高橋は「惑い」のために自殺もできず酒に溺れて現実から逃げ回ることしかできない。木部にその苦しさを訴えもする。

木部はそのような高橋に向かって捨てられた自分に比べればむしろあなたの方が幸せだと、高橋からすれば見当はずれな意見を言い、気持ちをわかってくれないあなたは残酷な人だと非難される。確かに幸福の度合いの比較をする木部は微妙に焦点をずらしている。木部の高橋に対する態度は一貫していない。近親相姦という事実には悩む高橋に心底同情するかと思うと、他方では彼の「苦しい」という呻きにはあなたのほうが幸せだと答える。読者には奇異に感じられるこの二つの態度の理由を第一段落の中だけで、つまり木部と高橋の会話の中だけで説明することはできないようだ。それは、第三段落の木部と葉子の会話で、木部が自分の不幸を語るとき高橋の例を持ち出す持ち出し方を見ると分かる。つまり、木部の態度の一つは木部のある打算に基づいている。この点は第一段落の範囲では読者に知らされず、木部自身も自分がある打算の中で高橋に接しているとは気づいていない。

(3) 作者が木部の不自然と読者の混乱を招く

木部は高橋の語りの中に二つの要素を見ていた。一つは近親相姦のおぞましきであり、他の一つは相思相愛で固い絆に結ばれた夫婦像である。高橋は妻に自分たちは近親相姦の夫婦だと伝えられないまま、その危機的な状況にもかかわらず固い愛を維持している。打算というのは後ほどこの相思相愛の夫婦と自分の六年前を比較しようという計算があるということだ。しかし、考えてみれば幸せな夫婦を参照枠として使えば済むのだから、近親相姦という深手を負った例を用いる必要性は全然なく、むしろ邪魔なくらいである。素直に読めば、第一段落の木部は自分が高橋に残酷にふるまっている自覚も、打算を働かせている自覚もないことがわかる。物語が進んで葉子に会うことになるとは全く知らないはずの木部が打算を働かせる余地は全くないのは当然だ。

なぜ生じるはずもない打算が働くなどということが起こるのか。作者の構想の勇み足というか、作者の錯誤による以外ない。結果としていかにも重大なことのように取り上げていても、後段になると近親相姦問題は背景に退いてしまう。何のために鬼面人を驚かすともいうように持ち出したのか意図そのものが疑わしくなるのである。『断橋』にとって最も重要なテーマは近親相姦にはないのに話題のおどろおどろしさに引きずられ、脚本の中の位置を理解しかねて読者は混乱し、木部は筋の通らぬ行動をとる。作者の構想上の欠陥が余計な混乱を生んでおり、この点は明らかに作品の欠陥である。このことが、近親相姦夫婦高橋の苦悩とそれに対する木部の関心の二重性あるいは落

差の意味することだった。結局、高橋の語りから、困難な境遇にあっても相思相愛の関係は不変なうらやむべき夫婦だという側面だけが物語の展開に必要な不可欠であり、それは木部の「愛の賛歌」と呼応している。一方は予感通り壊れ、他方は逆境にあっても不壊だという風に。

3 見せかけの平安……鎌倉の葉子

第二段落は 439 頁「早月葉子と倉地三吉とが橋のところに現われる」のト書き部分から 442 頁の終わりまで、葉子が「ええ……そうね……」と答えるところまでである。

葉子はどのような女性として現在を生きているのだろうか。

(1) 葉子に心服されたい倉地

二人は向こうに見える橋が渡れる状態かどうかを話題にしつつ楽しい雰囲気登場する。そして葉子の「ここまで来てみたかった」という言葉から旧知の場所であることが示され、それを受けて倉地は話題を当地での葉子のロマンスに振る。葉子は「腐った女みたい」な恋人もいたことをあっさり認めて、男出入りの多さに愛想が尽きただろうと媚びるような物言いをする。すると倉地は「さっきの話」つまり葉子が木村に金の無心をするのは「俺しの顔をつぶすことだ」という話を蒸し返す。木村という男はアメリカにいたことがわかるだけで葉子とどのような間柄なのか書かれていない。倉地は「木村は葉ちゃんに惚れとる」といい、葉子は「而して葉子は木村を嫌っている」と受ける。倉地は葉子にいろいろな要求があり不満もあるのだが、一連のやり取りから倉地が葉子とどのような関係を作りたいと思っているかがわかる。

倉地は葉子を経済的に保護することが二人の関係の安定をもたらすと考えている。金銭においても独立した女ではなく自分に依存する女であってほしい願望を語る。倉地は自分の懐の内に葉子を収めておきたいのである。それができてこそ「人間並みに見られていない俺たち」の関係が維持でき自尊心を満たし「男の顔」が立つのである。男の役割認識については決して新しい時代の人物ではない。葉子にもそのような男として認められたいと思っている。倉地は世評をものともしないが、性愛についてと同じように社会的な意味においても葉子を惹きつけてやまない魅力的な男として心服されたいのであり、結局「強い男」という古風な生き方、女性観を持った男として描かれる。しかし、書かれている範囲では倉地が葉子のどのような点に魅力を感じて「不倫」関係を続けているのか十分にはわからない。この段落は葉子の現在を倉地との会話を通して描くことにあり、倉地に焦点があるわけではないからこれでもいいのである。しかし、例えばもし自立心旺盛であることに惹かれているなら、依存されたいという願望とは矛盾する。この仮定で考えれば二人の関係はかなり不安定である。

(2) 与えられる自由からはみ出す葉子

では葉子にとって倉地はどのような男なのか。何か「人間並みに見られ」なくなるような醜聞が葉子と倉地について起こったことはわかる。倉地と同じく葉子も世間の冷たい眼差しを浴びても昂然と生きている。その意味では頼もしい相棒なのだろうが、倉地が葉子に不満を持つように、葉子も倉地に不満がある。面子を重んじる倉地は葉子の側から見れば支配欲の表れだし、依存されたいが自立心を認めないことだし、木村のことを気にするのは葉子を信頼していないことだし、総

じて男女の関係を古い型の中で作ろうとして、葉子が求めているものを表面的にしか理解していないと見えるのである。倉地をこのように見ることは葉子の片意地な性格のためなのだろうか。

倉地は葉子を愛すべき女性だと評価すればこそかなり自由に振舞わせてくれるし、鷹揚でもある。たぶんかつての木部とはそうした点で違っているはずだし、木村とも違うのだろう。しかし、葉子と倉地は金銭の問題で折り合いがよくない。そのことが端的に男女関係そのものに躓きがあることの象徴となっている。金銭的に不如意になることが関係を蝕んでいくありきたりの話の通りなのだ。倉地が木村のことを知れば関係がきしむことを知りながら無心をし、それを言われると居直る。居直らなければすべてを倉地の思い通りにされると知っているのであえてそうする。金銭という世の中の常套的なやり方で葉子を処遇しようとしていることに歯向かう。無心や居直りなどは支配をかくぐる手管なのだ。『ドモ又の死』のとも子のような分を守るという生き方ができない。独立・対等を保つことは呼吸と同じ生理的な欲求なのである。

倉地は葉子の求めているものが自分の求めるものと異なることを知っていて、それでも包容しようとする。しかし、葉子は倉地の腕の中に納まりきらない。倉地にとっては自立とか対等とかは考え方としてはともかく、現実の女との関係においてはあり得ないのである。だから、葉子の自立心と最後には衝突し、対立せざるを得ないことにも感づいているだろう。葉子がなぜそうまでするのかという葉子自身の内面が描かれているわけではなく、危ういとはいえ関係を持続させている理由も、つまり葉子の倉地への愛情の在り方も語られてはいないのでこれらは推測で言えるだけだ。あるいは「あの寒い晩……甲板で考え込んでいたとき……海でなければ聞けないような音楽を聞いてい」た(441頁)時に聞こえた「恋しい同志で呼び合っている」(442頁)声が葉子に告げたことの中に「愛の本質」があるのかもしれない。

今回の鎌倉旅行も危うい関係を隠したうえで一見「平安」な小旅行である。なんとなく危ういではなく、関係の亀裂がすぐそこに迫っているらしい気配が読み取れる。嘗て釣りをしたところのある場所に散歩を望んだ葉子が、それを望んだこと自体に、木部との偶然の再開という物語上の必要があったことのほかに、倉地との別れが遠くないことを葉子が受け入れるためにもこの場所を必要としたのだと思われる。少なくとも有島はそれを予告したかったのではないか。

(3) 懸崖を生きる葉子

さて、倉地との会話から葉子の現在が浮かんできた。倉地は外国航路の高級船員だとすると、西欧文明の先端に触れる機会も多く開明的な人間であるといえるのだが、葉子への接し方を見るとそのように言える半面、面子を重んじ古い男女関係の在り方を良しとするのも確かだった。葉子は倉地の前者の側面には心ひかれ、後者の側面には反発するのだ、と言えどとりあえずはその通りなのだ、倉地のフェミニスト風の前者の在り方にさえ反発しているように思える。

倉地に対して対等な関係を求めることは金銭で争うところに表れていた。それは一組の男と女の関係としての対等性なのだが、実はどのような在り方が対等であり平等なのかと問われれば葉子自身が答えきれない問いなのである。対等・平等が定義されていないのは愛とは何か定義されていないのと同じ事象である。物語の中ではすでに人物にも読者にも分かったこととして扱われている。だから読者あるいは戯曲の観客としては自分の中の平等や愛の観念を当てはめて理解することし

かできない。葉子は時代や社会に対する否定性としていつでもそれらに対して危うい関係に立たざるを得ず懸崖を生きているように見える。いつでも危うい方に梶を切って生きる、岐路を生きる宿命を背負っている女性ではないか。それが倉地の懐に納まらないということの意味であり、時代からはみ出していく生き方なのだ。少なくとも時代や制度に唯々諾々と従う生き方はしない。独立心・自立心が旺盛だとか、野心的だとかいろいろな評し方が可能だ。保守的な男たちからは生意気で思いあがった女に見え、進歩派を気取る男たちからは面白い新しい女に見えるが、どちらも葉子という女性の理解という点では表面的でしかない。しかし、作者は本当にそんな在り方をする女性として葉子を物語の中に持ち込もうとしたのだろうか。私の思い込みを言えば、イプセンの戯曲にモデルがある。

前回『ドモ又の死』の感想の時、留学中に書いたらしい『イプセン雑感』と十数年後の『ドモ又の死』とは別人の作品のようだと書いた。その『イプセン雑感』の中にも簡単に紹介されている四幕ものの『ヘッダ・ガーブレル』という戯曲がある。半年の新婚旅行から幸せな未来を作る計画を持って夫の故郷に戻ってきたばかりのヘッダが、夫の友人で自分も昔から知っている男が最近本を出版しその世評が大変高いという噂を聞く。彼女は夫とこの男だけでなくその他の人も巻き添えにして騒動を引き起こし、最後はピストルで自らの頭を撃ち抜いてしまう。作中人物の一人が「命の渇き」がこの悲劇を生んだと呟く。話はもっと複雑なのだが、大急ぎで紹介するとこんな内容だ。

金銭をめぐる諍いという象徴的な出来事をはじめ葉子の行動や思考の根底には「命の渇き」があって、その癒しを求めているのではないか。これまで葉子をこのように理解したことがあったのだろうか。「命の渇き」とは何のことだと問われると答えられない。が、「平等とは何か」「愛とは何か」も定義されておらず、強いて言えば物語の全体がそれらを定義しているので物語の流れの中で感じ取るしかなかった。「命の渇き」も同じだ。もっとも、ここで「命の渇き」を持ち出してもそれだけでは何かを説明したことにはならないというのもその通りなのだが。

4 すれ違う「夢」と木部の錯乱

第三段落は前後二つに分けて考える。木部の語りの中心が現在に移るからである。442 頁の最終行のト書き部分から、明快な切れ目ではないが 447 頁 11 行目「葉子……ええ本当に」までを前半とし、後半は 451 頁の 5 行目「葉子……さようなら」までとする。

この段落は木部と葉子が直接語る場面で、長さでは戯曲全体の半分を占めている。二つキーワードがあり、「愛・仕合せ」と「夢」とである。ただし「愛・仕合せ」がセットになって用いられることはなく、当たり前のようにさりげなく用いられる。だから「愛」「仕合せ」をめぐる「夢」の話が段落の骨格を作っていると言っている。

「夢」という言葉は全編で合計で 22 回用いられるが、第三段落の前半と後半に偶然だがそれぞれ 9 回ずつ登場する。つまり、木部と葉子の会話の前半と後半の主要な内容は「夢」という語に託されている。この「夢」は多様な意味に使い分けられる。第一段落の「木部の愛の賛歌」で取り上げた詩の所で 3 回、第三段落の物語の終局近くで木部が葉子に別れを告げる場面に 1 度使われ、都合 22 回である。

初めに国語辞典が「夢」という言葉をどのように説明しているかを確認したい。ここでは5つの意味・用法を載せている「大辞泉」の定義を紹介する。「岩波国語辞典」と「新明解国語辞典」も調べたが、「岩波」は4番目を、「新明解」は4番目と5番目を載せていない。意味の後ろの()内は「大辞泉」が掲げる用例である。

- 1 睡眠中にあたかも現実であるかのように感じる一種の幻覚(怖い夢を見る)。
- 2 将来実現させたいと思っている事柄(政治家になるのが夢だ)。
- 3 現実から離れた空想や楽しい考え(成功すれば億万長者も夢ではない)。
- 4 心の迷い(彼は母の死で夢から覚めた)。
- 5 はかないこと、頼りにならないこと(夢の世の中)。

(1) 「夢」語りのすれ違い

前半で「夢」という言葉が出てくる部分をまとめて引用する。「夢」を含むフレーズに①から⑨の番号を付けた。それぞれが辞典の何番目の意味で使っているかということに加えて、語り手が何を伝えようとしているか、煩瑣な記述になるが読解を試みる。

引用は444頁3行目から始まる。ここでは「夢」と「まこと」とのずれが焦点になる。

葉子 お別れしてから六年、①夢のようよう……

(中略)

葉子 私、今日昼頃鎌倉に来たんです。そうしたらどうしてもここがもう一度見たくなくて……私たちのいた家は取り払ってしまいましたの？見えませんことね。……本当に②夢のようですこと。

木部 あなたはあれからも③いろいろな夢を見たでしょう、④楽しい夢を。

葉子 あなた、そうお思いになって？

木部 ただ聞いてみるのですよ。

葉子 真面目に聞いてくださいます？……見ました。見ようとあせりました。……けれど⑤あの時のような美しい夢はもう見ることはできません……私は始終あの頃のことを思い出しています。ここであなたと一緒に釣りをしたりしたことなどを……私はどうしてあんなことをしてしまったのでしょうか。

木部 そうだ、⑥夢だったんですね。ところが僕は馬鹿だったから、それをまことと思い込んでいたのですよ。而してもう一つ、ところがです、そのまことが余りにたやすく眼の前でがらりと崩れてしまったので、僕は実際あわてました。然しまことだと思い込んでいた⑦僕の夢を、⑧あなたの夢がさましてくれたのだから、……人間は誰も彼れも⑨夢から覚めまい覚めまいとしているんだ、……覚めてみると淋しいものですね……

(以下、高橋についての話に移る。略。)

①「夢のよう」→1+5 幻覚・儂い。共に暮らした六か月では現実であったことが六年後の今では存在しなかった幻覚のように儂く感じられる。

②「夢のよう」→1+5。①に同じ。かつて住んでいた家もないことから現実が幻覚だったように感じる。時間も空間もなかったかのようだとやっている。

③「いろいろな夢」→2 実現させたい事柄。例えば、木部ではない別の男と新しい生活を始める試みも一度ならずあっただろう。木部が「夢」の語に託して葉子の六年間を推測してやっている。葉子は自分が楽しいばかりの暮らしを求めていたと木部が誤解しているとみている。「あなた、そうお思いになって」から伺える。

④「楽しい夢」→2+3 現実離れた空想。葉子の人生への欲求と実行力とが新しい現実を求める試みをさせたとしたら、その試みに手ごたえを感じ、さぞ楽しかっただろう。今も試みの途上かどうかは知らないが、生活は充実しているだろうと木部が推測している。この推測に対して、「ただ聞いてみる」などと軽い気持ちなら聞かないでほしいと頼む。葉子は「夢」について真剣に応答していると言っている。この後の葉子の言い方は複雑な響きがある。

⑤「あの時のような美しい夢」→2+3 現実離れた空想。なぜ④「楽しい」を⑤「美しい」と形容を変えて引き取ったのだろう。楽しいは「満ち足りて愉快で心が浮き立つ様子」であり、美しいは「調和がとれていて快く気分が晴れやかな様子」を表わす。また、木部が④「楽しい夢」といったのは葉子が木部とは別の六年の間に見た夢を指しているが、葉子が「あの時」といって指示しているのは木部と共に過ごした六か月のことを指している。六年間と六か月とが葉子によってすり替えられて較べられている。木部の④「楽しい夢」を見ただろうという問いかけの裏には、六か月の間本当は楽しくなかったはずだという気持ちが張り付いている。木部も別れる前と後を対比する意識で問うている。しかし、木部にとっては「楽しい」が「美しい」に変換されて応答されるのは予想外のことだっただろう。

葉子はすでに③・④の流れの中で満ち足りた六年間を過ごしたわけではないことを示唆していたが、これは同時に六か月はそれなりに満ち足りていたという意味でもある。むしろ、今ここで木部と六年間について語るつもりはないこと、六か月についてならば真面目に語ってもよいという意味表示だと見える。⑤「あの時のような美しい夢はもう見ることはできません」という言葉は六か月の肯定であり、その後の六年は調和に欠けた苦しい生活だったから、木部に羨まれたり妬まれたりしても迷惑であり、つまらない勘繰りをしてほしくないと言っている。言い換えれば、木部との生活を肯定的に振り返るとともに、木部の心情を汲んだ慰めでもある。葉子自身のいわば出発点でもあるので否定するのに忍びず、「始終あの頃のことを思い出す」のも木部を慰める以上の意味を持っているだろう。ただし、この「美しい夢」の生活と同時並行して別の夢を育てていたことには口を閉ざしている。

葉子が⑤「美しい夢」で触れる「あの頃」とは「美しい夢」の中に住んでいたころのことを指している。鯊釣りをしたことが唯一の具体的な生活の仕方やその場所として例示されている。また「どうしてあんなことをしてしまった」のかというのは、二人の関係を壊すようなこと、「美しい夢」を覚ます行動を指すだろう。その理由は書かれていない。壊したことを反省しているのか、壊れた原因は木部のほうにあると言いたいのか、経緯ははっきりしているが言わないでおくというのかいずれとも決めがたい。しかし、3の(3)で触れたイプセンを思い出せば、木部との関係の中に「命の渴

き」を癒しきれない決定的なものがあると気が付き始めたからだと言えるだろう。

⑤も十分に煩瑣だったが、次の⑥以降もわかりにくい。しかし大事な箇所である。

⑥「夢だったんですね」→1。葉子が「あんなこと」をしたために二人の関係・生活は壊れたが、それは短期間でも楽しく美しい現実としてまぎれもなく存在していた。しかし破局と共にはかなく霧消してしまった。その現実を「夢」だった、幻覚に過ぎなかったと納得したくて木部は過去の中に封印しようとしている。しかし、後ろに続く「ところが僕は馬鹿だったから、それをまことと思い込んでいたのですよ。」という言葉とつないでみるともっと微妙で複雑なことを言っていると思わなければならない。楽しく美しい現実が木部にとっては「本当のこと。嘘偽りのないこと」つまり「まこと」に他ならなかったという意味だ。だから木部は「美しい夢」が現実であり、嘘偽りのない実在なのだから壊れることがないと信じていた。この時、葉子の「美しい夢」は葉子に属するものでありながら、同時に木部が見る夢でもあった。木部は「夢＝実現させたい事柄」を二人で共有して生きていると思いなしていた。

ところが木部は「まこと」がたやすく崩れてしまって慌てたと言う。「愛の賛歌」に萌していた不安が現実のものになってしまったこと、葉子に捨てられたことを指して言っているのだが、なぜそんなことが生じたかその理由を、一対の形式で用いられる「夢」が語ろうとしている。その夢とは「然しまことだと思い込んでいた⑦僕の夢を、⑧あなたの夢がさましてくれた」である。

⑦「僕の夢」→2+3。現に存在し、将来も葉子と実現させたい楽しい事柄。9回出てくる「夢」の中でこの⑦だけが木部自身の「夢」だが、木部の夢は自立しておらず⑧「あなたの夢」に支えられないと意味を形成しない。

葉子が木部との暮らしを楽しんでいること、つまり葉子が「美しい夢」を生きていることが、木部の「まこと」でありそれが永続することが木部の夢だった。木部は葉子の一つ一つの言葉や行動に関心を持ち、共感し、受容していた。木部は葉子もまた自分に関心を持ち、共感し、受容してくれていると思っていた。はっきりした根拠はないが「関心・共感・受容」を「愛」の定義として使ってみたい。つまり木部は葉子を愛し、葉子もまた木部を愛して、二人の暮らしは愛によって築かれていると信じていた。それを木部は「まこと」と呼び「まこと」が即ち「僕の夢」だった。これはいつか実現したい事柄としての夢ではなく、現に存在しているものだったからこそ「まこと」と信じられた。六年が過ぎてみればあの「僕の夢」は虚妄に過ぎず、葉子と共有していたのではなかったと言わざるを得ない。その意味で、あとから名付ければ「僕の夢」は実体を持たない「夢」の原義通りの幻覚なのだった。六か月の「僕の夢」と六年後の「僕の夢」の使い方には大きな違いがある。2+3から1への変化である。

⑧「あなたの夢」→2。この「夢」を木部は鯊釣りを楽しんだ頃の暮らしを葉子が「夢のようだ」と呼んだその夢とは異なる「夢」として使っている。それは令夫人としての暮らしを求めて求め得られないことから、徐々に葉子の心が木部から離れて行った末に、新しく木部なしで木部を排除して形成されていった、将来というよりは今すぐ実現したかった願いという意味での「夢」である。木部から見ればその夢は木部の知っている葉子ではない別の葉子が紡いだ夢で、ある日葉子が木部の元を去ってはじめてもう一人の葉子がいたことに気が付いた時に、正確に言えば葉子が去った後

の苦い日々を過ごしつつ、去った理由は何かを木部が振り返る相当の時間の経過ののちに木部が渋々認めた「あなたの夢」である。当然その「あなたの夢」は木部を拒んで成り立つ夢だから木部を絶望させる。

「まことだと思い込んでいた木部の夢」は⑤「あの時のような美しい夢」から変質した⑧「あなたの夢」によって覚まされ、粉碎された。そして、夢から覚めてみるとそこには淋しい世界が広がっているだけだった。

葉子に捨てられてから六年が過ぎ、かつての自分自身を距離を置いて対象化できるようになって生まれる言葉だ。今、「夢から覚めた」というのは「夢」の定義5の「迷いから覚めた」という意味もまた担って用いられている。「永遠の愛」を詠ったこと自体が「迷い」であったという意味でもあって、後半⑬の「夢」にもつながっている。二人の「夢」はすれ違っており、同じことだが葉子の「夢」と木部の「まこと」には越えがたいずれがあった。そうだとすれば木部は葉子に何を語るができるだろう。木部の葉子への未練、恨み言以外にはないのだと思われる。つまり、再会して声をかけてはみたけれど、今ここで語るべき言葉を持っていないのだ。そのことを⑦『ぼくの夢』と⑧「あなたの夢」を一对で用いて木部が確認したわけだ。それならば作者有島は二人が再会する物語をなぜ作ったのだろう。

(2) 命がけの愛と固い絆

第三段落の後半では木部の語りを中心に現在のほうに移る。一通り T(高橋)の近親相姦の話をし終わった後、再び「夢」に話が戻る 447 頁から引用する。(以下、Tではなく高橋とする)。前半と同様、「夢」を含むフレーズに⑩から⑱まで番号を付けた。これらの「夢」のうち葉子が話すのは⑪の「夢」だけで、残りの8回は木部の語りの中に出てくる。つまり後半の部分は葉子が聞き役で、木部がもっぱら語り／口説きを演じるという構図になっている。その結果、木部の葉子への心情が少しばかりえげつなく吐露される。

木部 (略)一番悲惨なのは T と妹とが互いに命がけで愛し合っているという事実ですよ。

葉子 伺っただけで身の内が震えるようです…本当に不幸な方たちですね。

木部 不幸でしょう。

葉子 本当に。

木部 可哀そうな男でしょう。

葉子 ええ本当に。

木部 お葉さん、然し、あの男は愛しもし、愛されもしているんです。…お葉さん、⑩あなたの夢だ、而して私のまことだ、…それがあの男の場合には少しも崩れてはいないんですよ。T はどんな苦痛を嘗めてもそれだけは崩すまいとしているのです。…お葉さん、あの男は不幸な、可哀そうな男ですよ。

葉子 木部さん。

木部 なんです。

葉子 そう私を苦しめないで下さい…私は今でも、…⑪今でも、あの美しい夢を…

木部 (おっかぶせて)なあに、⑫まことは実は夢だったんです。⑬美しくとも夢だったんです。……⑭夢は破れてしまいました。⑮夢なら破れるさ。……⑯同じ夢を二度見る人間は世界広しといえども一人もいません。……然し、僕はお陰で見事に目が覚めました……僕の人生観が立派に出来上がりました。何しろ僕は命がけだったのですからねえ。……暗いものですよ……突き当りは何もない空っぽですよ。……⑰成程夢とでもいうんでしょうね。私はあれから落ち武者です。事業も企ててみました。議員の候補にも立ちました。文壇にも乗り出しました。……然し⑱僕の夢はさめきっているのだから、何をしても成り立ちようがありません。何をしたら駄目ですよ。……然し今は釣りをしています。半日じっとしてあすこに座っていると、よくよく馬鹿な小魚が二三尾は引っかかってきますよ。

葉子 けれどもそれはあんまり捨て鉢な……あなたはなさろうとさえなされば、何でもお出来になる癖に。

木部 出来るもんですか……人間に何が出来るもんですか……やがて秋も暮れてゆきますね。

高橋夫妻の在り方について木部が強調していることが三つある。第一に高橋夫妻は命がけで愛し愛されていること。第二に近親相姦という逆境にあること。それにもかかわらず第三に彼らの絆は固く、関係を崩すまいと必死であること。このことについて葉子も同意している。

木部は「あの男は愛しもし、愛されもしているんです。……、⑩あなたの夢だ、而して私のまことだ、……それがあの男の場合には少しも崩れてはいないんですよ。」と早速、第一と第三の点を引き合いに出して、自分たちとは大違いだと語る。木部の意図に気づいた葉子は「そう私を苦しめないで下さい」「今でも、⑪あの美しい夢を……」と木部の言い方に同意できないという意思を示す。葉子の抗議は半分正当で、半分外れている。その事情はいささか微妙だが、葉子の言葉に木部が「<おっかぶせて>なあに、⑫まことは実は夢だったんです。⑬美しくとも夢だったんです。」と続ける。ト書き「おっかぶせて」が「相手の言葉が終わるか終わらぬうちにすぐ次の言葉を高圧的に言う」という意味であることを考え合わせると、木部が感情的にも相当入れ込んで語っている状況を思い浮かべさせられる。事情が微妙だと言うのには理由がある。

「⑩あなたの夢だ、而して私のまことだ」とほとんど同じ言い方が既になされていた。それは「⑦僕の夢を、⑧あなたの夢がさましてくれた」の箇所だ。「私のまこと」が「僕の夢」と同じ意味になることは⑦「僕の夢」の分析で記述したので繰り返さない。木部は語順を入れ替えただけで二つを全く同じ内容を伝える表現として用いている。同じ意味というのは「あなたの夢」が「私のまこと」を壊したということだ。ところがこれを葉子の側から見ると少し異なってくる。

「⑩あなたの夢」は「⑧あなたの夢」より指示している範囲が広いことに注意したい。「⑩あなたの夢」に続いて葉子が「⑪今でも、あの美しい夢を……」と抗議し、それを打ち消すかのように「おっかぶせ」た言い方で「⑫まことは実は夢だったんです」が来る。なぜか。木部は「⑩あなたの夢」を「⑧あなたの夢」と全く同じ意味、つまり私を捨てて暮らす願いの意味で使っているのに対して、葉子はそれを「⑪今でも、あの美しい夢」に置き換えようとする。その意図から出た抗議だ。つまり、「⑩あなたの夢」として指示されている葉子の「夢」は一方で「鯊釣りを楽しんだりした半年の

間の暮らし」を意味し、他方では「木部の元を去った後に実現したい事柄」を意味することができる表現となっている。葉子は⑪の「美しい夢」を前者の意味で用いようとしたので、木部は後者の意味で使っているのだと慌てて強く言わねばならなかった。それを作者は「おっかぶせて」というト書きで示した。

「自分たちとは大違いだ」と記したことにも注釈が必要かもしれない。高橋夫妻について第一、第三の点について一応問題はない。木部と葉子の関係を単純化していえば、木部は愛しているが葉子は愛していない、木部は関係を信じていたが葉子は関係を壊したとなり、彼らと自分たちは見事に対蹠的で、確かに大違いである。木部はそれを葉子の心変わりのせいにしてしようとしている。しかし、高橋の妻は近親相姦の事実を知らない。そのことを知った上でなおかつ愛し愛されるという関係が持続できるかどうかはわからない。絆についても同じ。相思相愛も堅い絆も木部が言うほど確かではない。高橋と妻の間の、固い言い方で言えば「情報の非対称性」の点にあえて蓋をし、木部の鈍感さも「夢」語りには持ち込まずに、作者は物語の展開を図る。これが作者の書き方なのでこれ以上のことは言えない。鈍感さというのは次のことだ。「僕の行く道はお葉のゆく道だと疑わずに思い込んで」いるため葉子の夢が変わり始めていることに気づかない貧乏詩人であったこと、あれから六年後の現在、再婚もし、時には女郎屋に通うほど命がけであったはずの愛が劣化しているのに葉子の心変わりを非難できると思っていることである。

ところで、木部が⑫の「夢」から⑬の「夢」まで一息にたたみかけるように「夢」という言葉を操って葉子に伝えたいことは何なのか、すでに明らかだと思われるが確かめてみる。そのため先の引用部分を再掲する。

⑫まことは実は夢だったんです。⑬美しくとも夢だったんです。……⑭夢は破れてしまいました。⑮夢なら破れるさ。……⑯同じ夢を二度見る人間は世界広しといえども一人もいますまい。……然し、僕はお陰で見事に目が覚めました……僕の人生観が立派に出来上がりました。何しろ僕は命がけだったのですからねえ。……暗いものですよ……突き当りは何もない空っぽですよ。……⑰成程夢とでもいうんでしょうね。

木部は「まこと」は幻想(夢→1)でしかなかったこと、葉子に追隨して葉子の将来への期待と一体化するように自らの将来への期待を形成した事柄も(夢→5)儂く消えてしまったこと、「まこと」は破れたのではなく葉子によって破られたということを言おうとしている。六か月の暮らし(夢→4)は「迷い」に過ぎなかったと知って、その後の六年間はそれ以前の人生観とは別の立派な人生観で生きてきたと語る。「腐った女みたいな」恋人と批評されるにふさわしい葉子への応対ぶりだと言えばよいのだろうか。錯乱したとしか思えないのだが、いったいどんな人生観を確立したというのだろうか。命がけの愛が挫折した後だから「人間に何が出来るもんですか」という言葉通りの自暴自棄の虚無的な生き方をするという人生観が確立されたというのだろうか。事業を企て、議員候補に立候補し、文壇に乗り出したがいずれも失敗したのだから、言葉通りなのだ。高橋に向かって自分より仕合せだとうそぶくのも彼が地獄の苦しみを味わえても、自分はそれさえ出来ないと感じており、

未来を思い描けないからだ。高橋が不幸で可哀そうな男だと繰り返すのは、それ以上に自分は不幸な男だと言いたためだ。まるで葉子に愚痴を言い、虚無的な感情から抜け出せない責任は葉子にあるというために再会したようにさえ見える。有島は木部をそのように描こうとしたのだろうか。

5 「いい奥さんにおなりなさい」

木部の「夢」語りはほとんど一方的な語りかけだから、木部の心情の吐露以上の意味は乏しい。それならば、葉子は木部の「夢」語りをどのように聞いていたのだろうか。倉地との場面で描かれた葉子像の通りにふるまっているのだろうか。

木部に対しては一貫して受け身の姿勢で対処している。独演会のように語り続けるのに対して、時々合の手を入れる程度の応答の仕方である。葉子の明確な意思が示されるのは「⑪今でも、あの美しい夢を……」の部分である。木部との六か月の暮らしを肯定し、同時に木部を捨てた行動もまた肯定している。葉子自身の屈折した心情が見える一方、自身を対象化する在り方において毅然と振舞っている。その二重性を木部は理解しないこともまた知っていて、口説きを聞くのである。聞き役を務める忍耐強さも木部は気づかない。木部の度し難さに呆れながらあえて批判を口にしない。六年の間に世俗の知恵を身に着けた葉子が大人げなく捨て鉢になっている木部に静かに接している。仮に木部が高橋に葉子について語った葉子評(ロマンチスト・令夫人願望)を葉子に直接言ったとしても、黙って聞き流すだろう。たぶん頬に憐憫の微笑を浮かべて。

現在、葉子は倉地との思い通りにならない現実には抗い続けている。対等な関係を倉地に求めつつ倉地との生活の立て直しを目指しているはずだ。そこには「あの美しい夢」が埋火のように息づいている。男たちに対応する姿を通して葉子が描かれたのだが、だからこそ自ら新たな方向を語るようには登場しない。否定する魂、ここにはない何かを求める存在として「語り」に耳を傾ける。『ヘッダ・ガブレル』は「あの美しい夢」を「命の渇き」と呼んだのである。

さて、「夢」を含むフレーズの最後の一言で木部が葉子に語る餞の言葉を葉子はどのような気持ちで聴くだろう。

木部 お葉さん、⑫覚めてしまった昔の夢なんか漁らないで、いい奥さんにおなりなさい。いいですか。いい奥さんになってください。而して少なくともあなただけは、この世の中を仕合せなものと思えるようになってください。(以下略)

「いい奥さん」になったら「この世の中を仕合せなものと思える」というのだが、これはまたなんという餞の言葉だろう。啞然とする。有島は計算づくでこう言わせたのだろうか。私にはこの言葉で作品がぶち壊しになったと感じた。

作品の時代を考えれば「いい奥さん」の条件の一つは夫唱婦随にある。夫が中心で妻は夫の言に従うようなあり方を勧めるのである。

詩に「愛の賛歌」を歌って葉子を賛美した。一方で多少亭主関白風だがロマンチストらしく、「僕の行くみちはお葉のゆく道だと」うそぶいたが、それは自分の生き方を支持して一緒に生きてくれ

るという自信をあらわした言葉だった。しかし、最後になってこの言葉の意味は木部が無意識に求めていたと見做すしかない意味に反転し、文字通り亭主閑白の価値観として登場する。それは葉子が受け入れ難い価値観であり、六年後の別れの場面で改めて推奨するなら、葉子が無神経に侮辱している。木部自身の長々しい「夢」語りはここに行き着くための語りだったとは思えない。これでは、みすぼらしい自分の次元まで葉子に降りて来いと、命の渴きなど捨ててしまえと言っているようなものだ。木部の矜持はどこに行ってしまったのか。なぜこんなよじれたことが起こるのか理解できない。

一つだけ考えられるとしたら、虚無感の中で暮らしている木部が人生の一切を放下する在り方として体制に従順な生き方を選び、それが最も苦痛の少ない生き方だと葉子にも勧めているのかもしれない。葉子にそのように聞こえたとしたらなんと無残な事だろう。

6 終わりに

締め切りが迫っているうえに、「夢」を複雑に考えすぎたせいか、頭がかなり疲れて、もうどうでもいい気分になりつつある。読んでくれている人に申し訳ないのだけれど、書き残したことが三つある。駆け足で書いて締めくくりをしたい。

第一は、第一段落の終わりに呉服屋が登場し、釣りをする高橋と木部の境遇を「御結構なことで御座います」という言葉と、第三段落の終わりで倉地が砂浜で寝込んでいる高橋を「それはまた呑気ですな。」表す言葉についてである。呉服屋は「結構なことだ」という一言のために登場している。どんな悩みを抱えている人物でも、第三者の目には外見は釣りを楽しむ「結構な」身分の人に見えると言いたいのだ。第三者の目に映る姿を語らせ、内面の姿もまた相対化させるために作者が意図的に用意した人物である。忘れ物を見つけ出して戻ってきた倉地がふと気づいた高橋について「呑気」だというのも全く同じである。そして、倉地自身の葉子とのトラブルなどについても他社からは「呑気」に見えること、それはすべての人物に当てはまることを担保しようとしているのだと思われる。

第二は、『断橋』は『夢の浮橋』としてもよかったのではないかということだ。『源氏物語』の最終巻第五十四帖の巻名が「夢の浮橋」で、薫大将が浮舟との実らぬ恋に悩む話が語られる。木部と葉子の設定と似たところもあるのである。また、『新古今和歌集』の藤原定家の歌「春の夜の夢の浮橋途絶えして峰にわかるる横雲の空」を思い出す。『源氏物語』の余韻を響かせながら恋の嘆きを詠っている。「夢の浮橋途絶えして」などはまさしく「断橋」そのものとも見える。有島が「夢の浮橋」を思いついたとしても選ばなかったのには相応の理由が考えられる。現代人(1910年代)の恋／愛を王朝の時代のそれと並べて考えるわけにはいかない。例えば男たちと対等であることを求める夢を持つ女性は王朝の恋の約束事の世界には到底収まりきらない。

第三は、作者の制作の意図あるいは「夢」語りのまとめである。

正直のところ、作者がこの作品を書こうとした意図がわからないまま最後まで来てしまった。木部は雄弁だが、語りは自己中心的でしかない。だから木部が照らし出す葉子もくっきりした像を結ばない。内容が語られていないが暗示力にとんだ命の渴きが葉子の根源にあるとしたら、命の渴き

が見る夢をこそ正面から描く構想もありえたと思うのである。『断橋』の木部と葉子は二人とも悲劇的な描かれ方をしている。生き方の悲劇というよりは、作者の構想というか人物に託す夢そのものの空虚さによる悲劇だったのではないか。

1 主題と比喻

戯曲の題名が内容を比喩的に表しているとしたら、どんなことの比喩なのだろうか。

男女が壊れた橋の両側にいて会うことができない。カササギが年に一度だけ橋渡しをしてくれるわけでもなく、ましてあの時も今も会えないまでも心を通わせあうことすらできない。その意味だと思ふ。

三組の男女が登場する。高橋夫妻・葉子と倉地・葉子と木部。六人の中で高橋の妻は話題として登場するだけで自らは一言も語らない。木部の妻も存在が示されるだけだ。登場する人物はみな心を通わせあえない状況を生きている。

倉地は葉子という女性像を浮き立たせるために登場していてそれ以上ではない。高橋は木部と語るのだが木部は近親相姦話に本当は関心がない。葉子と話をするときのだしに使うためには、高橋が相思相愛の夫婦であれば十分だ。というわけで、六か月だけ結婚していた葉子に捨てられた木部が六年後再会して、あの六か月を振り返り、この六年間をどう過ごしたかを「夢」に託して語る、というのが全体の構造だ。この、六か月と六年間についてはおいおい書くことにして、

感想を書きつつ思ったことを先に書きたい。それは『断橋』は「夢の浮橋」でもよかったのではないか、『断橋』は「命の渴きが見た夢」とするほうが直截で分かりやすいのではないか、ということだ。

「夢の浮橋」はご存じのように『源氏物語』第五十四帖の巻名である。薫大将が浮舟との結ばれない恋に悩む話だ。どうせ喩えるなら木部と葉子を薫と浮舟にたとえればよいのではないか。そうしないのはどうしてだろう。『源氏物語』の連想から多く人は『新古今和歌集』の藤原定家の「春の夜の夢の浮橋途絶えして峰にわかるる横雲の空」という有名な歌を思い起こすだろう。「夢の浮橋途絶えして」はまさに「断橋」の意味にひびいたりではないか。どちらも結ばれない恋を嘆く、恋の嘆きそのものを歌い上げるという点では『断橋』そのものといつていい。

しかし、「夢の浮橋」の人物と『断橋』の人物では当然住む世界が違う。貴族と市民という違いのことではなく、世界観という世界のことだ。だから、作者が現代の人物の恋の悩みを書こうとしたら、古い日本的な情緒に満ちた「夢の浮橋」を使うわけにはいかなかった。現代人といっても 1910 年代を生きる人物たちだが、どのような恋に悩んだのだろう、その恋といよりも愛の在り方、愛を思う思い方を読み取るのが『断橋』を読むということだ。

2 現在の木部と葉子

木部は再婚し子供もいてはたから見るとそれなりに幸福な暮らしをしているように見える。しかし将来に希望を持ってはつらつと生きているかという点とどうも違うらしい。話相手の高橋が言うところによれば彼は父親違いの妹と結婚していたことを知ったというのである。しかも仲睦まじくて

妻を思いきることではないというので深刻な状態にある。しかし、同情しつつ木部は高橋夫妻が相思相愛で固い木綱に結ばれている点に関心を寄せている。

葉子は倉地と金銭のことで諍いをしている。倉地は古風な男で経済面もその他の面もすべて面倒を見てこそ男の面子が立つと考える。葉子は持ち前の自立心から倉地と対等な関係で接したいと考え、知り合いの木村に無心したりする。そこに言動の矛盾が隠れているが、対倉地との関係では独立した人格として関わるため必要なことだと考えて悪びれることがない。金銭感覚が示すように自由に生きるために必要な対等・平等な関係を求めてひるまず男と対質する。そのような女性として紹介されている。木部と別れた後の六年間その姿勢は貫かれていた

3 木部の「夢」語り

木部は六か月だけ葉子と結婚生活をしたが、その後葉子に捨てられて六年が過ぎている。葉子に再会した木部はあの六か月の生活を回想し、この六年の葉子の生き方を推測しそれらを「夢」という言葉に託して語り続ける。葉子を賛美する詩を作ったことを語り、二人が将来への期待を共有して暮らした夢のような生活を回想する。しかし、その間にも葉子の木部から自由になりたい願望が膨らんでいって、間もなく二人の暮らしは破綻を迎えた。

その後の六年について、葉子に楽しい夢を見ただろうなどと問いかけるが、葉子の方は「あの時のような美しい夢」と六か月間のころのことしか答えない。六年間についてはほとんど口をつぐんでしまう。固い愛の絆で結ばれた高橋夫妻を引き合いに出して、自分たちの結婚が不幸な結果に終わった原因は葉子にあり、裏切られた自分は不幸になったと葉子を責め続ける。

別れ際に「覚めてしまった昔の夢なんかは漁らないで、いい奥さんにおなりなさい」と木部としては餞の言葉のつもりで言う。これが葉子という女性の生き方にはとんでもない侮辱の言葉だと木部は気づかない。

4 葉子の命の渇き

六年が過ぎて処世術も身に着けた葉子は、侮辱的な言葉に敢えて反論することもなく聞き流して去っていく。葉子は「あの時のような美しい夢」を追い続けていて、それは埋火のように心を掻き立てるのである。「美しい夢」とはどのようなものなのか、具体的に語られることはない。辞典には「将来実現したい事柄」といった木で鼻を括る様な説明しかない。イブセンの戯曲の主人公の言動を登場人物の一人が「命の渇き」がそうさせるのだと説明する場面がある。葉子もまた「命の渇き」に急かせられて木部を捨て、たぶん多くの男との別れを経験し、今は倉地と緊張した生活をしている。「命の渇き」とはどのようなものか。答えは用意できない。美しい夢＝命の渇き＝？自由を求める心、対等な人間関係を求める心 etc. とりあえずそれらの積分されたものがそれにあたるだろうと、？の言い換えでしかないことを記せるだけだ。